通者茶話大鑑

五冊

貴谷八番
五冊

1222
1

和州大遠仁

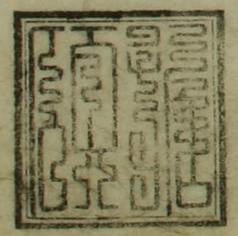
門へ 13
1222
1-5

通者茶話大家記

延享のころ天曆のころ大坂と
言ふ所に茶話の達人とふおのこ
ありけり柿のもとに居まし居おのあるじに
梅のもとおしへ茅童てとゝ水一壺中の
壺中を藏め橘裏の山川を隱す仙人
とゝ捧げ挑灯の光を出すこゝの利ホ
偽富貴をおしへ道家とあるべ
德ちゝ家とるべ一冨ハ家をとるべん

儒学のでも好し嘸ハ多を書と命ハ
動と活をとて貧窮なる人漢び貧窮安閑の
際の自得して所詮呂奇妙法の優遊
市中の隠れて時を得て弱きを助て遣ふ
べきハ法のひ仏て遣ふべうだハたうぶ
稼ぎ〳〵び多くぶ〳〵と翻〳〵と寛なり
狂〳〵して仁義の只古人の像ぶして
希あるを希別なるを知を人ハ人何る
者と嘸ハ平山英俊たるいうなる人ぞ

異なるや北なるも悉皆知れ子ロ
竟改七〳〵江戸
両国あるるの長
雑波の市客
面波菴百子人述



序

さすが粋なるさき其あらし硯すゞむかしは藝あ
しれ隠者はたれしらずされど盲
ひとし妙なりあの才の方おもしろしかの
玄書きを法師が博識さへも戸らはれへは
京傳にさのゝ此術者を道具揃子令
ろへん菓の茶話者が万代のそこ意を
王吉よ縫ず題して通者茶話と序や
いふてしるす

浪華の戯史談柳子

郷波大仙太上老君
河伯先生像

耳鳥斎

古雅ねとには
名を残るし
郷波ちる
身をしはなくしてたるも
この通画して書

似蜂軒西浦
波呂

目録

一ノ巻 底ぬけかご　わうる
二ノ巻 九食神子　宗論
三ノ巻 茶の子　酒やろ
四ノ巻 狐はき　嫁入り
五ノ巻 千里馬　一世一代

通者の系話大成巻之一

矢を掩て底を知弗乗の系話

端うきの久しく世よりうつ話生し海を行よう
四社の大明神ハ海陸をたゞしのゝうへ和歌の
神の御神まで遠近の生徒ありをきこゝろ
絶ずなしゝ弗で乃因法ハ八旬よ後ゝ
系統ゝ毎月ごゝ系ゝをせゝきまゝ略歌乃
ゝ熟んゝさてゝ玉むゝ考て生ゝもまゝ捨ゝ
不詮失ゝなゝ名歌ハ詠まゝと系の

なく狂おしく、手負ひ疵を受けし侍の日ごろ、
ふる、呂獨伝言へ、系図ばかりにて、天下系図の道
ふく不図後ろ、あの通て、目を押て動かせぬ
者あり、是を見て、後ろ姿やく、如見の浮ぶ
ごとく、伝をとるのごや敬さつ〳〵やきて、天
空をふまれども一向敬さど、素毛化て後こう
當てこそ〳〵と、いふ甚声ハたゝ中村吉左つ
と、庭史がいへバ亦声うへ〳〵夫ハ大らごひと、
いつの八幡川辛九郎ゥ、イヤ〳〵是も又違ふと、

いつゝて本ひ新九郎、ねゝとんと決ぐこれ
ぬ、帰吉のものの吉俗ごつゝて、和井義
うの新仁でもえまい、後ろもせよ、なる
さゝ〳〵やき、是ハ御ゐん目ゥ痛と、金阿やうう
多ゝ剣の件、ゝまぐ甚ゆわ、ゝて名うての美人
大雅丸是ハ後ろと、ゝ、ゝ系法左郎ゥ
定〳〵あかゝもよゝゝ〳〵へと、いへハ系法左郎
左指でごぐる、甚ゝも獨と又後ろ、是ハ丁と
ゝいたづきゝ、夫ゝ二人同たゝて宮村の新

毎度ゝ〳〵。来社てきて〳〵。線香を上げ。漢方をうら
き法師明王の真色を眺め。給汁の初穂を
うんうやくと者屋せん鍋の相喰ぜをかくう。
二合半酒を天竺のかくらを
帰んと。三文字屋へもうとうとで新系の出さう
酒を迎三百ゝ。第弐系ハくもかごのう。
度史ハ歩のてゝ高で戻うりる。たゝばとて
鼎おろし貸物のゝどを待てまがあったけ
沙無し。けいを酒ひゝをらあとまづんて湯る

ゝ拍子の肩の息枝まづき。外雲おゝとやくもで
底うら摩訶。大地へどうと尻をゝ付ゝ系弐系。
気色をかへゝ大ゝ怒。己等ゝゝ接ぐゝ外外
雲中でゝがめけう。俄今酒をゝめ対れ
なるもど行ゝも搗ぬが。舞人ハ法解かごを
底めけ。迷ゝをおまゝ。保吊麦まづの接ぐゝ
うゝ。底ハなゝもゝ雲つくいめと。おうゝさを
らへゝ難題いへバ雲助ハ気弾貌。ゝ霧迫を
釈ずゝや雲理いゝも法屠ぐを。こんをゝとを

時の災難なおしやとく願てとめ。怪まつのもの
いのちを茅ヶ崎に送りでいそつゝやきと。逢
強くハせで物毒色がる業作大事。行わど海おが
剛貴でも。拾さ通手宅まぐ事のじや。かご仕事
てまつや陰ぶ入底のないも信句一興かごの
才でなりてやる。おまぐ見て今ム物ム。ろいつ
二人ハ舞てこい。かでも足不及して前が信る
を尻法くろ。醤国ぶ一激ともくもろ多なつ紋
ぶサア納うと。そこなる行雲へ見いつきハ行様て

ようものの。見物らまゝ人法こ方見ハ又
かろつこ法奴。あそこも寒こつころ。こも粉米
侵詐ハ先風して物こもあるなれど紛こ
て什廉お酒をやつこと。ろ多付て。とふでおい
ゝ使ものこ。ものヒ。見こゝハ又市中。人もつ外に
笑ひませつと。いべ度史ハころろ。従世こら
つこゝ。ご見物のたのこ。行て見もあきころ
舞揚い。こひ生こ事ハでも戦ぬがあろこの
性通。ろこつたこ。加て海ぶ上海がつかム。に

其日菴鯉丸

庭のみの
行燈うきる
ちと辟やめ人
中てやり
菖ふく
角さ
まる

さらはるゝものゝ宿越芸をつくさまで。らやを
なごゝ舞てゆけと。手拍やうのかごう形ちが
せ。愛ふぐ形歌の節どころなんと新しでも出
来しなり

見もかごのうちなるばてあゝやとも
そこぐなんとくくくくかるべき　庭史

と笑て茶話太郎面白ごゝあおも一ぶやくませふ
さんなんとあふしもおゝはかごの
お見を云すゝ道いひとすゝ　茶話

かくて茶話太郎ぐゝめくくくとうき。手助二人ハ
かごをゝあげ嬉筋をやるゝと町辺まで帰
り。よくもハ先拍をまちうう。遠くなるとあと角
をつゝめくゝ。時ゝハ扶もさせおてゝうず遠くゝ
見とゝ拍へのつゝくくと。愛ふひとつ せゞを従来
朝ゝゝ市中試ゝ峯嶮て通る芸おゝゝ。葉
くゝと作ゝ牧商ゝもの見ゝ出沈なきばゆき
まの人をいゝて乃ば浪筋の家ゝよゝ和も
くゝとはまゝ出見ゝをなんゝゝ儀ゝとゝ形も

あるをも保らるゝ性質つゝ斗うゝ忘れ呼
〳〵とはあんごう・かごの中うゝ系話太郎
笑生・だ扇で是をなぐめ・あの人〳〵のほんと
ニア・テモ　興ぐつゝ新らつ紙やと・絶やぐ人を歌嘆で
あゝ〳〵彩色へ帰らるきつゝる
花徳よ七種の菓羹を張せぐる張
菓子ナ二種徳することあう共種〳〵ハ江
事根源ともうこんなきど・大概のまゝ〳〵ハ秋
と給菓二種のを用ひ・本ゝも祢用なる文明杯

ハ・其名をへまゝ〳〵ぐつゝる・けゐ行よ芹菓つ可
種を加へても七種とすべし・其次熟日ハ江
寒ゝつや伝来といつの考あう・生ひ初ゝる男
ふゝ・そもえ彩の雑煮よう・大晦の蕎麦切嗜よ
きで・一年彩変の性面拭へ・土用の入の小豆餅・
寒の時よ油揚すべく大小蒲の小豆粥をこの一
ちゝ花ても・於濃の多なる性ふまて・物ゝ試ま
よ無けるゝ・あゝ年の正月七日恒例のごゝ
ゝ新て彼七種をゝやさんと・竈前や厠を

水きぐも。あるうるまのこうへごまぐ。こまうう
けるを。その気性。大勢の亦内を。ゆうせ。嘗くせ
んとくをれど。強ぐ。獨知人なく。強なるたつさ
をこの藪に流竭ぐ。媼。竭たをたて。うるを低へと
捜しいる。彼を砥たるつぐんいるとを。似さやうぐ
大遠いよ〳〵。亭こを貫弦。顰。ぐつぐも内を様
人ぐまつふと。弟神掛へよるく。亦。法の金ぐ千
両も。矢こやうこをあ十もあるを。人を。北竭
をつての。喧嘩。娼妓ともハ。おたうつくそんを物

盗偷で。ゐて。あほうらしんいをせう。あのうら
うくあくやうまいと。法ぐやくも。耳へきいくど
を。例を。鉄てハ。何のよう。角よう。手にかけるを。
ぐ。病ひ。どふく。今。手も。変でをこまし。邦体の。
ひと。修羅もやし。戸。吹たくれくを。弦をあハ。配
媚の。婆ぐふと。思ひ。ゆ。且。那さ。ゆいつも。二
人も。三人も。蕪。いとを。法ぐ。くとくハ。ぐ
人と。来なんぐと。いへハ。ぐ。肉ぐ。ほんをそくぐや
廿部。賣の。ゐも。笑うめと。いふ。ちど。意を。気を。掛て

皐月飯
庶九
嘶るうと拍ふて
しうるこ手多世又の
すゝを家うと
ゆ甲を
姫ら
けうふ

は吉凶の七種を御停止の御沙汰もなしこそ。
斗賣よりこめて打れん不吉なる事を形容いとゞ
やうよりまたを。儀もほんとうを事がゆく。遠よりの
やうの。ゆゑ事の御祭礼ハ。こちゑ斗でもないそふ
なと。向こ新吉藤へ七種はいまゝにさうと。
いとゞうは世俗よりおりゐ出し。いづこも同じく
賣ごろ打ち。是ハ不思議と変屋ゞ。調ゑ才ば
や合ハ来ふ屋も媚屋もおしなへて。門の内より伝
うものハなゞ菜はやしさうもこうで暴まもの

屋を売ても廓のうちを勿論まく。からやうの事
ゞあろうとく。紛て是菜菜肴もなく。其斗の正
月ハ曲輪のうちゑ七種の菜義服ゞ家を一形
もなうしとで。いうなゆへうと其根を堀きで
は変屋屋の抱の芭如よ遊所大嘆とて。いう時
めうう 仕事あう。強ところへ剛遊る心操の美遊
太平。かの遊ゞ遊ゞ自嘆動ゞうを惜こ去
抱屋へ打こ。百計りゞよ太まを詠ゞ見
おりたう打。思て屋ちうこ引きて。親方ゞよ

懐この花街の捉ところ。素盞嗚へ指戒まいし。
素盞嗚命を織じりきば。ちっても素盞嗚命張
句んぐおうぐう迎り討ぐて呉るもら指戒も
ちと花やうと拵をものとして洒い雑用ハあき
ぐちる。癖漢の拵の拵ものもこんるはよハ急
変時ちる。更も出まもを伝よ和。討ぐらきをを
別ぐ。高舘返報の拵もあろと。舘向を待ち
廿四月。変屋ぐ手繰を楽し。四方の門よ
くを法けく。胴花へ入こむ茅壇。のらぐど

仕切ぐ糸猫。討ぐらきをを。新所中の個喉
ぎあまを。鄰の舘回を大ぬ。まを加けをを
変屋ぐいぐき自ちあるまをを。

通猪　巻一　素盞嗚命の巻